1920年代中国における女性知識人の葛藤

――『女生・婦人』をめぐって――

楊　　力

1923年、廬隠（1899–1934）は北京女子高等師範学校（以下では、女高師と略す）国文部に在学する女子大学生をモデルにした中編小説「海浜故人」を創作した。この自伝的色彩を帯びる作品は、当時の女子大学生が抱える恋愛の悩みや人生の彷徨をめぐって描かれたものである。

程俊英[1]（1901–1993）は「海浜故人」の登場人物の一人である宗瑩のモデルであり、廬隠と同じく女高師文芸研究会初期メンバーだった。彼女は1980年代後半に「海浜故人」とほぼ同じ登場人物を持つ小説的回想録を書き記した。「海浜故人」は在校生の大学生活を描いたのに対し、程俊英の作品は四人の主人公が卒業した後の生涯を描いた。それを作家の蒋麗萍が書き直し、1995年に長編小説『女生・婦人』[2]として出版した。『女生・婦人』は全知的な語り手によって四人の生涯を豊かな筆致で描いている。本稿では、小説における登場人物の一人、廬隠らと同じ文芸研究会メンバーの陳定秀[3]をモデルにする玲玉と、玲玉の主人の愛人である柳蝶依の人物像を考察することにより、清末民初の中国における女性知識人の「性」をめぐる苦悩を呈示したい。

玲玉は女高師生であったころ、親友の宗瑩からアメリカに留学していたという宗瑩の伯父である剣卿を紹介される。これを機に二人は文通し始め、徐々に恋に落ちていった。卒業後、玲玉は故郷の蘇州に戻り、剣卿はアメリカから帰国する。二人は蘇州で初めて互いの顔を見ることができ、ついに二人の縁談が決まった。ところが、その最初の顔合わせの場面は、二人の結婚生活における不仲の伏線となっている。

> 剣卿が玲玉に熱烈な愛情を吐露すると、玲玉はそれを余りにも恥ずかしく思い、ついに頭をあげた。
>
> 「玲玉、どうした？体調が悪い？」
>
> 玲玉は弱々しく首を振った。剣卿は彼女を抱きしめ、彼女の髪、耳、首に深いキスを浴びせた。彼女の唇にキスしようとした時、剣卿は玲玉の顔に涙

がこぼれているのに気づき、その美しく雨に降られた花のようになった顔を見た剣卿はあわてて聞いた、「どうした、ダーリン？」

玲玉は恥ずかしげにハンカチで涙を拭きながら低い声で答えた、「私は極めて弱いです。こういうことを耐えられません。想像したことさえありませんでした。」

剣卿は思わず笑った「私の玲玉ちゃん！西洋の女の子は街中で恋人とキスするのが当たり前なんだよ。君は部屋の中でさえ私とキスをする勇気がないんだね、君は…」話しが終わらないまま、剣卿は再び玲玉に顔を上げさせ、ショックを受けてかすかに開いた玲玉の唇に自分の唇を押し付けた。(139)

結婚後、剣卿は仕事の関係で客の接待が増えた。夫婦関係もうまくいかず、二人の隔たりはますます大きくなる。

ある日、玲玉は友人の露沙に夫婦関係の苦しさを告げた。

ここ数年、私は次々に妊娠した。〔中略〕私は剣卿と…（性的行為、筆者注）することは好きではない…彼を満足させることはできないのがよくわかっているけど、そういう時の彼が無様に思えて…まるで上海弁でいうごろつきになったような…でも、どうすればいいのかわからない。初めから独身の道に進めばこういう悩みはなかったかもしれない。(197)

玲玉は積極的な剣卿に応じようと努力したが、自分が「堕落」したように感じて涙があふれ、結局受刑したかのごとき辛さは玲玉が我慢できるものではなかった。(206)

小説では、剣卿の肉体関係に対する熱い欲求と、玲玉のそれに対する嫌悪が詳細に描かれた。いつも「まともな生き方」を心がけていた玲玉にとって、夫婦間における肉体関係は汚らしいものであり、重い負担となる一方だった。そして、玲玉の堅苦しさを理由に剣卿は浮気をするようになる。

小説に登場した剣卿の浮気相手の柳蝶依は彼の秘書であり、玲玉と対照的な女性であった。

彼女は情熱溢れるような人間であり、波のような黒髪は濃密で、南国の熱帯植物のごとく茂っている。茶色がかった肌は肥沃な土地のようにしっとりしている。いつも濃く化粧された黒目は淵のようで、しっかりと塗られた口

紅は唇をより厚くみせ、見たものはもっとよく見たいと思わずにはいられないほどだった。彼女のチャイナドレスはスリットが太ももの根元まで開き、歩く姿は人を誘惑するようである。(192)

物語後半では、剣卿がとうとう柳蝶依と同棲するようになる。最初は遊びで始まった浮気だったが、しだいに剣卿は柳蝶依のやさしさや女性らしさに溺れ、愛情を抱くようになる。さらに、剣卿だけに留まらず、玲玉の弟までも柳の魅力に惹かれるようになり、自分の姉は柳蝶依より女らしさがずっと劣ると感じるようになった。

剣卿は何年も家に帰らず、子供の生活費だけは使用人を通して送ってきた。玲玉は一人で子育てをし、苦労しながら職業婦人の生き方を貫いた。上海の時局は日中戦争のために緊張が高まり、剣卿も柳を連れて玲玉の家に戻ってきた。玲玉はことあるごとに柳蝶依から嫌がらせを受けるが、すべては自分が選んだ人生だと思い、耐え続けた。

それからしばらくして、柳蝶依が難産で亡くなると、剣卿は家を出た。ほどなくして、玲玉も乳癌で世を去った。

中国では、9世紀の唐代に科挙制度が定着すると、遊郭の妓女と科挙受験生との間で恋愛が発展した。中国において、生殖に直結しない夫婦の快楽は否定され、浅ましい行為とされていた。熱情的な愛は、妓女との間にのみ存在するものだった。即ち、夫婦の間に恩や礼が存在する一方、恋愛は遊女との関係にのみ存在したのである。

ところが、20世紀初頭になると、五四新文化運動により、恋愛結婚が提唱され、性欲は恋愛や結婚に結び付けられ、セクシュアリティをめぐる「貞操論争」、「性教育討論」、「新性道徳論争」などの議論が盛んに行われた[4]。そして、章錫琛、周建人、周作人のような女性の性欲を認め、それを満足させるべきだと主張した論者もいた。彼らの発表した論文や書物は、同時代の女子大学生たちに広く読まれていたと考えられる。

彼らの言説は同時代の女子大学生にどのような影響を与えたのだろうか。また、彼女たちは自分たちのセクシュアリティをどのように受け止めていたのだろうか。

その一例として、当時女子大学生だった程俊英の小説を解釈してみたい。

この小説では剣卿が欧米で教育を受けていたため、性に対する考えが極めて奔放であるように描かれている。この構図は、伝統的な考えを持つ中国婦人と

欧米の近代的な考えを持つ男性の間にある溝に見えるが、その背後には、当時の中国における性の解放運動の影響があると思われる。

明清時代の中国では、理学の理念に基づき、性の問題は厳格な道徳意識によって制限されていた。しかし、そのような環境にあっても、男性により大きな性的自由が認められる一方、女性の性的自由は与えられていなかったなど、セクシュアリティをめぐって、ジェンダーにおける非対称性は大きかった[5]。明清の上流階級の子女は幼いころから『閨訓』[6]を教わり、貞淑従順、自粛する態度で生きるよう、厳しく教え込まれた。それが清末まで続き、民国期に入ってもその影響が綿々と続いた。

良家に生まれた玲玉にとって、肉体関係を自ら求めることは良識に反する行為であり、欲求や感情を抑制できることが女性らしい生き方であると信じていた。ところが、皮肉なことに、彼女が嫌悪するタイプの女性、即ち性的魅力ばかりをアピールする柳蝶依が夫の剣卿の心を惹きつけ、二人の間は肉体だけでなく精神的にも深い愛情で結ばれたのである。

伝統的道徳と近代的思想が混在する清末民初の中国において、女性知識人たちにいかなる葛藤があったのか。20世紀初頭におけるセクシュアリティをめぐる議論は近代男性知識人を中心としたものだったので、女性の態度は明瞭ではなかった。しかし1920年代後半になると、ようやく女性作家が描く性的苦悶をテーマとした作品が現れるようになる[7]。「性の解放」は女性にとっていかなる意味を持つのか、女性の「性」は本当に「解放」されたのか、もしくは新たな形で「束縛」されていったのかといった問題について、今後も研究を続けたい。

注

1　程俊英、1901年に福州で生まれた。1917年に北京女子高等師範学校に入学し、1922年に卒業後、女高師学校誌『北京女子高等師範文芸会刊』（1919–1924）の編集者を務める。1923年に心理学者の張耀翔と結婚する。1926年、北京女子師範大学の国文教師を務め、1929年に上海へ赴く。以降、上海の高等教育機関で働く。1993年に死去する。現在では、中国古典文学研究の分野に大いに貢献した教育家と評される。

2　蒋麗萍・程俊英著『女生・婦人“五四”四女性肖像』上海文芸出版社、1995年。以下、本書からの引用は文中にページ数を示す。尚、翻訳はすべて拙訳である。

3　陳定秀、1900年に蘇州で生まれた。1917年、北京女子高等学校に入学し、北京女子高等師範学校「文芸研究会」初期メンバーとなり、数多くの文章を発表した。1920年、女高師の学生たちが演じた「孔雀東南飛」は社会的に大きな反響を巻き起こした。この劇で陳定秀は「小姑」の役を担当した。1922年、陳定秀は女高師を卒業し、1923年

に親友の程俊英の叔父である程樹仁（1895–1974）と蘇州で結婚した。程樹仁は近代中国映画事業の開拓者の一人である。結婚後、陳定秀は夫の仕事を手伝いながら子育てに専念する。結婚してしばらくたった後、程樹仁は浮気し、婚姻は形式だけのまま続いた。40年代、程樹仁は台湾に行き、以降二人は二度と会わなかった。30年代から陳定秀は前後して蘇州女中、上海工务局女中（上海市第一女中）で教鞭を執っていた。1952年に死去する。

4　中国における「恋愛」について、張競氏により研究が行われた。張競『近代中国と「恋愛」の発見』岩波書店、1995年6月。

5　明清中国の男女性愛について、呉存存氏により詳細に論じられている。呉存存『中国近世の性愛 : 耽美と逸楽の王国』鈴木博訳、青土社、2005年8月。

6　女子が守るべき規則など書かれた書物。代表的なものは後漢の班昭(女)が書いた『女誡』などが挙げられる。

7　代表的な作品は丁玲『ソフィ女子の日記』(1928)などが挙げられる。